

平成 23 年度広島県公民館等職員研修会（東部会場第 3 分科会）

分科会テーマ	学習機会の提供
発表内容	絆「地域と歩む公民館」～地域を元気にする公民館活動について～
発表者	宮地 徳満（尾道市中庄公民館）
コーディネーター	戸田 美之（広島県立生涯学習センター） 三宅 予枝子（福山市南部生涯学習センター）
運営委員	品部 義朗（竹原市市民局生活部）
記録者	戸田 貴恵（尾道市中央公民館）

1 分科会のテーマ・目標・進め方の確認

目標：公民館が町づくりの学習拠点としての役割を果たしていくためにはどのような地域の学びの場をつくる取り組みが必要か、事例発表をもとに考える。

2 事例発表

(1) 中庄公民館区の概要について説明

中庄公民館は、因島のほぼ中央に位置し、館区内には中庄町(5,452人)・外浦町(478人)・鏡浦町(155人)がある。因島全体では、人口が年々減少しているが、中庄町は、わずかながら増えており、特に若者の定住があり園児・児童が少しではあるが増えている。

(2) 中庄公民館の施設の説明

鉄骨平屋建て、敷地面積2,347.30㎡、床面積958.50㎡、部屋数10室、駐車場100台分、平成22年度の公民館利用者は3万人超。職員は、嘱託館長1名、臨時職員1名、公民館運営協議会雇用職員1名の計3名で、公民館業務・行政業務を行っている。

(3) 公民館主催講座の説明

平成22年度は、2講座実施(青少年育成23、成人教育7、高齢者生きがい6、環境問題1、地域コミュニティ5)で、4,919人の受講。

(4) 本題の取り組みの発表

平成22年度地域課題発見講座実施概要の説明

尾道市中央公民館の「学習プログラム開発・提供モデル事業」を利用し実施。

① 趣旨

地域をより元気に活性化させていくためには、どのような課題解決が必要か、公民館を取り巻く地域住民と一緒に考える講座(まちづくりワークショップ)を実施し公民館がまちづくり学習拠点としての役割を果たしていく。

② 実施主体

中庄公民館及び重井公民館

③ 参加対象

公民館職員・公民館運営協議会委員・まちづくりグループ・公民館利用サークル等

④ 講師

平木 久恵さん((有)グリーンブリーズ代表)

⑤ 講座の日程及び内容

○1回目 9月28日 中庄公民館

講演「みんなで作る私たちの町」

講演後、6つのグループを編成し協議「私たちの地域はどんな地域なのか」

○2回目 10月8日 重井公民館

グループごとにチーム名とテーマを決めて、地域課題や地域の宝を整理。

○3回目 10月29日 中庄公民館

2回目で各グループがまとめたテーマを「どのようなプログラムにしたらいいか」協議し、発表。

平成23年度学習プログラムの実施の説明

① プログラム作り

各グループが発表した後、講師から「各グループのやりたいことを掛けあわせてもいいのでは」

との助言を受け、3つのグループで出された案をもとに、学習・議論を重ね、公民館に求められている町づくり・地域づくりの支援ができるのではないかと考えた。

どのような方法で具体化するか、公民館運営協議会委員・公民館職員で検討し、「高齢者と子どものふれあい講座」を新開地区の研修所で実施することに決定。

テーマは、「高齢者と子どものふれあい学びあい」とし、目的は「地域の集会所を有効利用し、地域の人々と交流を深めることで、豊かな人間関係を育む」で、中庄公民館が主体となって、実行委員会組織を立ち上げ実施することに決定。

実施場所の選定理由は、数多くある集会所の中で、新開地域は、近年若い人が増えているが、地域の人との交流の機会が少ないことと、一人暮らしの高齢者と子どもが多いということ。

③ 講座開催準備

実施に向け「高齢者と子どものふれあい講座実施要項」を作成し、実行委員を構成。構成メンバーは、公民館関係者と新開地区の世話人。講座開催までに2回の実行委員会を開き、第1回目(7/14)で、開催日時・役割分担・(交流内容)・参加対象者・案内状の送付方法等を協議・決定し、第2回目(10/21)では、引き続き交流内容を協議し、決定。また、開催までの期間に、地域の方から「手伝いたい」との申し出があり、3名のボランティアが加わった。さらに、準備を進めていく中で、詳細に話し合い、いろいろなアイデアで、一部準備の簡素化ができる等。

※ 同じ地区の役員さんを含め実行委員で話し合い世代を超えて準備を進めていくことも、今回の「ふれあい講座」の1つの意義ではないか。

※ 自分たちの地域の絆を深め、盛り上げていこうという強い思いを感じた。

案内状については、子どもたちが高齢者の家に直接案内状を持って一軒一軒訪問し、手渡した。このことは、お互いの温かい交流に効果があったと思われる。子どもたちも「いろんなお年よりの方とお話ができ楽しかった」との感想を述べていた。また、訪問する中で、地域の方々から趣旨に賛同し協力したいとの申し出があり、講座に必要な食材を提供していただく。

④ 講座実施当日

○と き 12月4日(日)10時から12時30分

○ところ 新開区研修所

○参加者 高齢者13名・子ども18名・幼稚園児4名・保護者13名・実行委員10名・ボランティア3名

○内 容 ・ 開会挨拶(実行委員長)
・ 童謡「たき火」合唱
・ タペストリー作り・まつポックリツリー作り
・ 昼食(カレー)

○感 想 ・ 公民館は遠いから参加しにくいだが、(ここは)近いので送迎してもらわなくても自分で歩いて参加できる。
・ 知らない人たちでも、同じ新開地区だと思えば気楽に参加できる。
・ おじいちゃん・おばあちゃんとの同居もないので、地域のおじいちゃん・おばあちゃんたちと触れ合うことで、優しい心を養ってほしい。

⑤ まとめ

地域の絆を深めるために、お互い歩み寄ろうと、少し努力することも大切。公民館は、その「きっかけ」作りのお手伝いをするのが役目ではないか。後は、地域にバトンタッチする。

この講座の準備を通して、たくさんの方の協力を得たことは、主催者の思いもよらなかった驚きと喜びであり、新開地区は、これをきっかけに交流の輪が広がると確信できた。

公民館としても、今後このような講座を他の地区にも広め、地区の人と人との交流の機会を提供して、より住みやすい地域づくりに貢献していきたい。

3 質疑応答・意見交流

Q 高齢者と子どものふれあいという講座はとてもよいと思う。どうしてこのようなプログラムができたのか。

A 中央公民館の「学習プログラム開発・提供モデル事業」制度を利用して行った「地域課題発見講座」を実施したのがきっかけです。このワークショップから、地域の集会所を利用してなにかできないかという思いになり、今回の講座を実施することになった。主催者側は大成功だったと思う。

Q 他の集会所もやりたいという意見がでなかったか?

A 今回実施した新開地区では、やってみたらよかったので、定例化したいとの意見が出て、実際に定期的に実施する方向で動いている。他の1地区から実施したいという話もでてきている。

Q 公民館主催、実行委員会を組織したということだが、その実行委員の選定はどのようにされたのか。

A 地域の中心組織から公民館でリストアップし、趣旨を説明しお願いをしていった。日頃から、公民館に出入りする方が多く、皆さん趣旨に賛同し、快く引き受けてくれた。

○ 補足説明

「学習プログラム開発・提供モデル事業」は、尾道市で平成21年度からスタートした事業であり、生涯学習社会の中での公民館の役割として、現代的課題や地域課題に対応した学習機会を提供していくための事業。

具体的には地域の学習ニーズを把握し、学習課題を設定し、学習プログラムを作成し、講座を実施することが一連の事業で、学んだことから実践するというもの。

今回の中庄公民館で実施した講座は非常に良かった。こういった講座を今後も広めていきたい。

Q 事業に係わる予算をお聞きしたい。今後、自分の公民館で実施できるかどうかの参考にしたい。

A 「学習プログラム開発・提供モデル事業」は1事業9万円。1回3万円の予算で、1事業につき、3回の講座を実施。

今回の「高齢者と子どものふれあい講座」は、材料費で1万円程度。地域の方から米・野菜など食材の提供もあり、費用はかけずに実施できた。

Q 府中市では、1講座6,000円。これは市内講師の場合で、市外講師だと8,000～10,000円程度。1回30,000円の謝金はむずかしい。

4 グループワーク

「地域の学びの場をつくる取り組み」新プラン作り

- (1) 各地域での交流を深める上での課題
- (2) その課題を克服し地域の学びの場をつくる取り組み案
- (3) 進行・発表者・記録者を決めてから行う

5 グループ発表

D グループ

(1) 人を集めるには、どのようにしたらよいか。

- 子どもを考えて、行事を進める。
- リーダーは女性にする。
女性部を作る。女性中心に動いてもらうとかなり人が集まる。
- 幼・保・小・中と連携

(2) 地域行事の活性化

- 地域とのコミュニケーション
 - 人間模様
- ⇒ 町民ミュージカル
or お芝居

E グループ

地域のコミュニケーションを考える～子・親・祖父母の絆～

- 地域の課題から交流プログラム案を3点
 - ① 子どもからITを学ぼう (インターネット)
 - ② 親から子への伝承 (料理教室)
 - ③ 三世代交流 (グランドゴルフ大会等)

F グループ

広い地域の中でかかえる問題が絞りきれない。

大きいエリアの公民館は、地域とのかかわりをどうするか。

地元管理の自治センターは、地域とのかかわりは問題ないが、高齢者と若い

世代との交流事業が難しい。

Aグループ

(1) 学びの場を作るための問題点

- 男性・若者が少ない。
- 世話役が少ない。
- 出入りする人が決まっている。
- PRがなかなか伝わらない。

(2) 解決策

- 男性対象の場合は、興味をひくような企画をする。男性は、そこに役割がないと集まりにくいので、とにかく参加者を頼るような講座にする。
- 具体的講座として、グランドゴルフ・テニス等子どもと交流できるもの。もちつき・竹とんぼ等。食べ物を主にしてもよいのでは。
- PRについては、チラシを全戸配布するという意見もあるが、口コミが強い。今後は、携帯メール等でお知らせしていくのもよいのではないか。

Bグループ

テーマ 若い世代の参加をどうするか

- 地域には、高い高齢化率のところがある。例として、大浜 45%、小野 47%。講座を企画するときは、公民館の都合ではなく、利用者にあわせる。若い人は、毎年決まった祭り等には出てくる。
- 解決策
成功のパターン (key point)
若い女性の口コミを狙って講座を企画する。例) フラワーアレンジメント

Cグループ

(1) 課題1 来館者が固定している

- 解決策 1. 社協・民生委員・公民館が協働して、交流サロンをつくる。
- 2. 募集方法の改善 子どもを活用する。

(2) 課題2 サークル講師の高齢化

- 解決策 受講生の中から講師を養成する。

6 個人での振り返り

7 発表者からまとめ

コーディネーター
の所感

- オリエンテーションで分科会のテーマ・目標・進め方の確認やアイスブレイクとしての自己紹介を行ったため、分科会をとともよい雰囲気で行うことができた。
- オリエンテーション・自己紹介・事例発表・質疑応答・意見交流・グループワークの時間設定は適切であった。特にグループワークでは、多くのグループが熱心に話し合いが進み、分科会の目標を達成することができた。
- グループ発表の時間設定が不適切であった。結果的にグループ内での分科会の振り返りをすることができなかった。
- 事例発表は発表の内容がとともわかりやすく効果的であったため、グループワーク「地域の学びの場をつくる取り組み」新プラン作りでの話し合いが活発に行われた。
- 会場の広さ、設備等は参加者数にあったもので適切であった。
- 会場の机の配置について事前に会場準備を依頼していたができていなかったため非常に困った。